



「わざわざ放課後に一人で来てって……告白でもするつもり？ って、な訳ないわよね。また何か変なこと企んでないと良いけど……」

メイクなしでも十分に整っているほどの綺麗な顔立ちをして、薄めのブラウンカラーの長い髪を揺らしながら、丹生谷 森夏は放課後、校舎を歩いていた。

彼女は旧友であり、自分の知られたくない過去を知る七宮 智音に呼び出されていたのだ。

二人は友人関係ではあるけれど、放課後に呼び出されるとなると、森夏は七宮のエキセントリックな性格故の警戒はしている。

警戒はしているが、彼女が他者を傷つけたり貶めたりする人間ではないこともまた理解していた。

だから、警戒しつつも不安はないようだった。

そして違う学校の生徒である七宮がやってくるほどのこと、しかも自分への用となると何だかんだで面倒見の良い彼女は無視する訳にもいかないのがあった。

スタイルの良い身体、制服の胸元をパツパツにしている大きめの胸を歩くたびに揺らして森夏は指定された教室に向かっていった。

”ガラッ”

入口の扉をスライドさせて中に入る。
そこは何の変哲もない教室だ。

「来たけど……七宮？ わざわざ放課後に呼び出して何の用？ ……………七宮？
…………ソフィア？」

「……………」

放課後の教室。

普段から使われていない空き教室であり、その中には一人、七宮智音しかいない。

ピンク色の髪をツインテールにした彼女は、自分で呼び出した相手である森夏が来たというのに、背を向けて反応を見せないでいた。

その行動を不審に思い、森夏はかつての呼び名『ソフィア』という名で彼女を呼ぶと――

「ふっ……ふふ……にっはっはは❤️ よく来たねモリサマ！」

「……………はあ？」

――七宮はクルリと綺麗に、練習でもしたように片足を軸に回転して振り返った。

そのどこか芝居がかった行動に呆れつつも、森夏は懐かしさに口元を少しだけ緩めていた。

昔と変わらずにいる七宮の姿は時に過去の自分を思い出させるが、その彼女の変わらなさは森夏に「あの頃もそう悪いものじゃなかった」と思わせる魅力もあった。

可愛らしい笑顔を見せる七宮、泣き黒子の様に小さなピンク色のハートのシールを目元に張った彼女は、いつものようにマフラーをつけていて、室内だというのにロングコートを着ていた。

「それで、何の用なの？ そのコート見せたかったってことじゃないんでしょ？」

呆れたように質問をしていく森夏。

いつもは着ていなかったロングコート、それは彼女にとっても『格好良いアイテム』であることは理解出来ていた。

素敵な装備を手にしたから見せたかったってこと？ なんて予想をしながら、森夏は口元に柔らかい笑みを浮かべた。

この時点で彼女は旧友との時間を楽しむ気持ちに心がシフトしていた――。

「モリサマに私の……魔法魔王少女 ソフィアリング・S P・サターン7世の真の姿を見せるときが来たのさ！」

「へえ……………真の姿って……………なに？（また何が始めるのかしらね？）」

——いたのだが。

いつものように大仰な名乗りを自信満々にする七宮、その姿を呆れつつ見ている森夏の前で、彼女は自分の着ているコートに手をかけ——。

「私は魔法魔王少女を超越した——ハイグレ人間なのだ♥♥♥」

——それを一気に脱ぎ捨て、ドギツイピンク色で、股間のカットがかなりキツイ——『ハイグレ水着』姿を晒した。

七宮は割と小柄だけれどもその胸、おっぱいは結構たわわである。

その身体を隠すのはピンク色で、脚の付け根を晒すほどのハイカット水着だ。

「は……あ……？（何言ってるの？ え？ なに？ え？）」

いきなりのこと、あまりにも予想外の行為に森夏の脳は半ばフリーズしてしまったいた。教室で水着姿になるだけでも既に理解を越えてしまっている。

しかも、水着だけではなく、マフラーをつけたままの彼女は足を大股に開いて腰を落とし、両手の指を真っ直ぐにしてむき出しの股関節のラインに這わせると——。

「すうう……………♥ ハイグレっ♥ ハイグレっ♥ ひいいんっ♥ ハイグレえっ♥」

——勢いよくその手を引き上げ、スライドさせていく。

水着で抑え込まれて深めの谷間を見せるおっぱいを揺らし、腰をカクカクさせて、可愛らしい美少女顔を赤く染めながら気持ち良さそうに『ハイグレポーズ』をしだした。

年頃の女の子が、というかまともな人間がやるには恥ずかしいにも程があるポーズ、それを嬉々として行う七宮の姿に森夏は完全にドン引きしていた。

「え……は……………なに、やってる……わけ？ え、ちょっと……キツイって……………ええ……？（罰ゲーム？ いや、誰がこんなことさせる？ え……？）」

「ハイグレっ♥ ハイっグレっ♥ ああんっ♥ ハイグレっ♥ ハイグレっサイコー

♡ ハイグレえええっ♡」

旧友のまさかの行為。

理解することすら不可能な行動に、森夏は顔を青ざめさせすらしていた。

七宮が自分の行動を恥ずかしがらず、堂々とするには尊敬の念すら抱いていた森夏であっても、こんな無様な姿は受け入れることが出来ないようだった。

ドン引きしつつも理解不能な行動に止めることも、その場から立ち去ることも出来ないでいる森夏だったが、その彼女はマジマジと七宮の姿を見ていてあることに気が付いた。

「っ……！？（え、嘘？ 嘘でしょ？ ソフィア、乳首立ってない？ え？ なんてあんなにピンピンになってるの？ 興奮、してるってこと？ 嘘、嘘、嘘、嘘……ええ……？ しかも、あそこも濡れてるけど、あれって……？）」

そう、ハイグレを繰り返す七宮の乳首は水着にしっかりと浮き出るほどに勃起していた。

胸自体が立派なサイズである彼女の乳首もまた立派なようで、大きさをアピールするように勃起し、また股間にも染みが出来てしまっていた。

小柄で童顔、可愛らしい美少女である七宮の乳首はこれでもかと勃起して、その存在を見せつけていた。

水着を押し上げているその立派な乳首は彼女が興奮してしまっていることを示すもので、今もまた――。

「ハイグレっ♡ はっ♡ ハイっ……グレえええっ♡♡」

――がに股で手をスライドさせると、その行為、それに興奮してしまったようで身体を反らせるようにして絶頂していた。

のけ反る様にして声をあげると、カクカク腰を震わせておまんこからマン汁をポタポタと床に垂らしていく。

ややむっちりした太ももに透明な汁が伝っていき、それは膝下の靴下まで垂れてしまっていた。

「ハイグレっ♡ ハイグレええ♡ ひいいん♡ ハイグレえええ♡」

「なん……なの……………（何が起きてるの……これ……）」

愛らしい、やや童顔寄りの美少女顔をだらしなく緩めて叫ぶ姿に理性や慎ましきは感じられない。

変わり果てた友人の姿に森夏はドン引きして、なんて声をかけるかすら迷っていた。

恐怖に近い感情の中、目の前で繰り返される行為、今現在の森夏では名前すら付けられない思い浮かべられない行為をただただ見つめていくしかない。

むしろ、何も見なかったことにして帰ってしまおうかと思うほどの痴態、恥晒しとも言える七宮の行動に森夏が戸惑っていると――。

「ハイグレっ……♡ ふふふ！ にーはっはっはっは♡ まさに隙アリとはこのこと！
油断したなモリサマ♡」

「は……え？」

――グッと一段とキレの良いハイグレポーズを決めて、おっぱいを”たっぶん♡”と揺らした七宮はいつの間にか手にした玩具の銃のような物体を彼女に向けた。

その、あまりにもチャチで安っぽい銃の見た目にポカンとしている森夏目がけて引き金が引かれた。

瞬間――。

「ハイグレ光線照射♡」

”ビビビビビ！”

「な、え、きやあああああ！！！！？」

――見た目に違わぬ安っぽい、子供の玩具の銃のような音を立てて光線が発射された。

その光線を浴びた森夏は、瞬間自分の身体を確認する。

『何かで撃たれた』という感覚に怪我をしていないかとチェックしていくが外傷はなく、しかしそれに安心する間もなく――。

「え……？ な……え？」

――自分の意志とは無関係に両手を大きく広げて、脚も広げて立ったまま『大』の字になっていく。

「なに！？ なに、なんなのこれっ！？ ソフィア！？ これ、なんなのっ！！？ ふ、服がっ……？！」

「ふふふ〜♥ モリサマにはどんなハイグレ水着が与えられるのかな〜？ 私とお揃いだ
とイイね♥」

「何言ってるの！？ ちょっと、ほんとになんなの身体が、っ！ 服も、なんでっ！！？
動かないで、なに！？」

焦り、恐怖、そして困惑の中で、森夏の着ていた服が揺らぎ、歪み変形していく。

普通のブレザータイプの制服だったはずのそれが、まるでマーブル模様の揺らめくと、色
は違うけれど七宮が着ているものと似た形をした水着に変化する。

変化したと思ったらまた制服になり、それがまた水着に、その変化を何度も何度も繰り返
して最終的には――。

「は……あ？ な、なんなの……これ……？」

「ふああ♥ さっすがモリサマ♥ ハイグレ水着もか〜わいいね〜♥ いやん♥ お
っぱいむっちふり♥」

――森夏の着ていた制服は白の、純白のハイグレ水着に変化して、その腕には二の腕ま
で隠す白の手袋に、むっちり♥して健康的にエッチな太ももに食い込むこれまた白のニー
ハイソックス♥

そして、七宮が言うようにそのおっぱい、スタイルの良い身体を魅力的に見せる大きめの
胸は水着がぴったりと張り付くようにしてその形を見せつけていた。

「これ……なにっ……？ って、キツイんだけどっ……」

その水着は森夏の身体にはやや小さめであり、形は七宮のそれと変わらないけれどかな
りピチピチで色々はみ出してしまっていた。

おまんこにはもちろん食い込み、マン肉がはみ出してしまっているし、大きくてきれいな
おっぱいは窮屈そうに締め付けられて少し動くだけでプルプル震える。

「っ……なに、これ……（こんなの裸より恥ずかしいんだけど……）」

”むっちい♥”

白い水着から溢れそうになっている美乳♥ 綺麗なおっぱい♥
その乳首の形までしっかりと見えてしまっていた。

下品とも言えるほどに森夏の身体を晒し物にする水着に彼女の顔は真っ赤になっていく。恥ずかしさは感じているのに、その身体を手で隠すことも出来ないまま、七宮の前でおっぱいを見せつけるように、水着から溢れそうな柔乳を晒していた。

そのキツさ、恥ずかしさに対する戸惑い、そこに加えて彼女を困らせるもう一つの感情があった。

それは―――。

”きゅっ♡”

「っ…………っ！（これ、きつすぎっ！ 食い込んで、少し動くだけで……なんか、っ、き、気持ち良いんだけど……！）」

―――水着が小さいが故の食い込み、その快感だった。

森夏の股間、おまんこに食い込んだ白の水着は彼女が少しでも動くたびに擦れてしまい、ただでさえ恥ずかしさで敏感になっている身体を責め立てる。

それはおっぱいの方も当然同じ、大きくて形が良い胸に張り付く水着、”むちっ♡ ぷるんっ♡”と今にも零れそうなその巨乳も少しの動きで布地が擦れて快感に繋がってしまっていた。

おっぱいへの刺激は当然乳首にも伝わっていき、水着の布地をゆっくりと、だけど確実に押し上げていっていた。

「白の水着がキュンキュン食い込んで♡ モリサマのおっきなおっぱいパツパツ♡ これはエッチですね～♡ 純白水着がモリサマに似合ってるし？ だけど、清楚じゃなくてスケベなおっぱいって感じでイイね♡ 乳首も生意気にツンツンしちゃってる？」

「見ないでよっ……！ ソフィア！ これ、元に戻しなさい、ひゃうんっ♡（だめっ♡ 動くだけで、これっ……♡）」

ジロジロと興味深そうに、何よりも嬉しそうに楽しそうに七宮は森夏の身体を眺めていく。

興奮すら感じているように目を潤ませた彼女は、森夏のおっぱい、キツめの水着に押しえつけられて柔らかそうに”むにい♡”と歪むそこ、その乳首突いたりしていた。

ただ指で軽く乳首を触れられただけの刺激に甘い声を漏らした森夏はグッと口を閉じて、恨めしそうに七宮を睨んでいく。

感じてしまっているをことを隠そうと必死に耐えている森夏だったが、ハイグレ光線の効果は服装を変えるだけにあらず。

何とか気持ちを落ち着けようとしている彼女の腕が自然と股間へと伸びていく。

「え……へ？ な、なに、これ」

「お♥ ふふふ♥ にーはっはっは♥ モリサマにもついに覚醒の 때가訪れたようだね♥ ハイグレ人間・モリサマとして！」

「は、はぁ？ だから、そのハイグレ？ってなんなの?! 言ってること全然わかんない、えっ?! ちょっと、待って、ほんと、ま、え!？」

楽しそうに、実に嬉しそうにしている七宮とは対照的に理解不能な状況に焦りを見せる森夏。

その彼女の理解が追いつく前に、股間に伸びた彼女の手、その指は綺麗にピッと揃えられて伸びていく。

「なに……え？ まさか……（これって、さっきソフィアのやってた?!）」

足はしっかり開かれてやや腰を下ろして、股関節のラインをしっかりと見せつけた。綺麗な、無駄な毛の一本もないツヤツヤした股関節のラインに手をセットしたモリサマ。彼女の頭の中にはさっきの七宮の動きが思い出されていく。

「いや……いや、やだっ……やだ！」

「怖くない怖くない♥ 怖くないよモリサマ♥ 私も一緒にやってあげるから♥」

自分がとんでもなく無様なことをしてしまう予感に震える森夏。

小刻みに震える身体、ピチピチの水着で押しえつけられたおっぱいもそれに合わせて“たゆたゆ♥”と震えていき、布地で擦れた乳首は少し勃起しいてしまい可愛らしい姿を浮かび上がらせていた。

その姿を愛おしそうに見つめた七宮も、森夏の目の前でハイグレの準備。

自分の現状を理解できない、受け入れられない、理解不能への恐怖で震える森夏は大きなおっぱいを見せつけるように胸を張り、股関節に当てた手をスライドさせ――。

「は……はい、ハイグレえっ♥♥ (なに、これっ♥ 食い込んでっ♥ こんなバカみたいなことで何で気持ち良くなってるのっ?!)」

——逆らえない本能のままにハイグレポーズを決めた。

まだまだぎこちない動きながらもそれは紛れもなくハイグレであり、それを見た七宮は嬉しそうに笑うと彼女もまた「ハイグレっ♥️」と森夏に見せつけるかのようにキレの良いポーズを決めていく。

「は……ハイグレって何なのよこれえ！ 訳わかんないでしょ！？ ハイグっ……ぐううう！」

「ふっふっふっふ〜♥️ いくらモリサマが抵抗しようともハイグレ洗脳光線には逆らうことは出来ぬ！ ってね♥️ ほら、一緒にハイグレハイグレっ♥️ きもちーでしょ♥️」

七宮によってハイグレ洗脳を弱めかけられた森夏は必死に抵抗しようとしていくけれど、身体はゆっくりとだけれども確実に動いていく。

ハイグレポーズを取ろうとしてしまう自分に打ち勝とうとする森夏は歯を食いしばって、綺麗で可愛らしい美少女顔を台無しにするように鼻の穴を広げて呼吸を荒くしていく。

そんな彼女の前で七宮は非常に可愛らしい笑顔のまま「こうやるんだよ？」とレクチャーするようにがに股でのハイグレポーズを披露していく。

食い込みの激しいハイグレ水着姿の七宮の股間部分は腕を動かす度に少しずつ濡れていく。

それを見た森夏は——。

「ひっ……っ！ 私は、絶対っ！ そんな風に、ハイグっ……！ ならな、いっ！ レえ……！」

——自分の身体が勝手に動くことに困惑しつつも強い意志でハイグレを拒否しようとしていく。

だが拒んだところでロクに抵抗は出来ない。

ハイグレ光線の威力は弱くても確実に、森夏はそのスタイル抜群の身体を見せつける背筋を伸ばした姿勢のまま、ぎこちないハイグレを繰り返していく。

一回、一回、森夏がハイグレをする度に水着の下のおっぱいは——。

”ぷるんっ♥️ たゆんっ♥️”

「ハイっ……グレえ……っ！（こんなのが、何で気持ち良いのよっ……♥️ っ♥️）」

——大きさと柔らかさを見せつけるように揺れていて、乳首も水着を押し上げるよう

にしてドンドン勃起していて、自分の存在をアピールしていくようだった。

ハイグレ一回ごとにおっぱいは大きく震えて、勃起した乳首が上下に揺れる。

ぎこちない、まだ慣れていないというか抵抗しているハイグレの動きをしながら快感に耐えていく森夏の目の前で七宮もハイグレポーズをとって、こっちもこっちで大きめのおっぱいを揺らしていた。

「ハイグレっ♥ ハイグレ♥ モリサマ……♥ (綺麗で格好良くてスタイルも良いのに、ハイグレの動きが下手で可愛い……♥)」

自身もハイグレをしながら、森夏の姿をジロジロと、本当に舐めるように見つめる七宮。

彼女は、森夏のそのぎこちないハイグレの動きを非常に気に入ったようで”ゴクリ♥”と大きな音をさせて生唾を飲んでた。

その興奮もあってか、ハイグレをする彼女の股間は更に濡れだしてしまっているようだった。

どこか甘酸っぱいメスの香りをさせる七宮は、ハイグレをやめると森夏の背後に回り込む。

「ハイグレっ……な、何する気っ!？」

「そんなに警戒しないで欲しいんだけどな～♥ ん……♥」

股関節に当てた手をゆっくりと、まだ慣れていない動きでスライドさせてのハイグレ。

その度にピッチリとした水着に”むにゅうん♥”と押さえつけられたおっぱいが、”たっぶたぶ♥”揺れていく。

ピンと尖って触って欲しそうにしている乳首は水着を突き破りそうにさえ見えるほどの勃起ぶりで、七宮はそれを見てまた生唾を飲んでた。

そんな七宮の行動に当たり前に警戒をする森夏ではあるけれど、ハイグレをする以外の行動はとれないので足を開いて、おっぱいを揺らしてされるがままになっていく。

「ただ……♥ 可愛いモリサマと遊びたいってだけなんだよ？ほんとに……♥」

森夏の背中に大きめのおっぱいを”ぼにゅうん♥”と押し付けた七宮は、ハイグレを繰り返す彼女の脇腹、水着に包まれたそこに優しく指の腹で触れた。

「ひぁあん♥ ハイ、グレっ♥ やめなさいっ! 脇腹弱い、ハイグレえっ♥」

「ん〜♥ モリサマの水着♥ スベスベで気持ち良いよ♥ 白の水着にこのおっぱいは本当反則だよね〜♥ おっぱいも可愛いし、手袋もニーソも似合ってるハイグレ姫って感じ？」

「ひいっあ♥ ハイグレええっ♥ やめてっ……ハイグレっ♥ 誰がハイグレ姫、よおっ♥ ハイグレええっ♥」

敏感な脇腹に触れられて、甘い声を漏らす森夏はそれでもハイグレを続けていく。

繰り返す度にぎこちなかった動きは滑らかになっていって、股関節のラインをなぞる手の動きはスムーズになっていた。

スムーズになる度に森夏のおっぱいは大きく揺れて、乳首もその存在をアピールしていく。

もちろん、七宮もその揺れるおっぱいに目を付けたようだった。

「モリサマのおっぱい大きいよね〜♥ おっきいだけじゃなくて柔らかいし……♥ あ、結構重い♥ ほれほれ〜♥ おっぱいずっしりい♥」

「揺らさないでえっ……♥ ただでさえ、今、つ、辛いんだからあ♥ ハイグレっえ♥ (乳首擦れてダメえええ♥)」

何とか抵抗をしているようで、ゆっくりとハイグレをする森夏のおっぱいを下から持ち上げるようにしていく。

七宮は本当に嬉しそうで、手のひらの上に森夏のおっぱいを乗せて、柔らかさと大きさ、そして重さを楽しんでいた。

「あは♥ これはSランクのおっぱいだね♥」

「なによおっ、それっっ！ ハイいっ……ぐううっ……グレえええ♥ (どうしても止まらないっ、なんでっ!?)」

水着に押さえつけられていてもその大きさはしっかり健在で、七宮が手を揺らすとまるでスライムのように“たゆたゆ♥”揺れていた。

乳首も水着にくっきりと浮いていて、ピンと立っていて、揺れて擦れる度にもっと勃起しているように見えた。

おっぱいを遊ばれながらもハイグレを繰り返す森夏はその精神力でハイグレ洗脳に打ち勝とうとしているようだけれど完全に焼け石に水であった。

「綺麗で♥ 形も良くて♥ おっきくてずっしりおっぱい素敵〜♥ (必死な抵抗かぁいいね〜♥ うんうん♥)」

「やめてええ♥ ハイグレええっ♥ほんと、変に、おかしくなっあ♥ ハイグレっええ♥ ひいん♥」

顔真っ赤でハイグレポーズを繰り返す森夏。

最初は羞恥からの赤面だったけれど、既にそれには快感も混ざりだしているのは明白だった。

股間に食い込む水着には染みが出来ていて、がに股に開いた足、その太ももにはマン汁が伝っていき白のニーハイソックスに吸い込まれていく。

自分では認めないけれど、森夏の身体は既にハイグレで感じてしまっていて、ハイグレをする度に形の良いおっぱいを”たゆん♥”と揺らして甘い声を漏らしていた。

そのおっぱいの乳首、勃起し切ってしまった淫らしいそれを見つけた七宮は、艶のある、プルンとした唇を森夏の耳元に寄せた。

彼女の背中に大きめのおっぱいを押し付けて、吐息すら感じられる距離にまで密着すると――。

「にはっ♥ モリサマにご報告♥ おっきくて素敵なおっぱいの上で乳首ちゃんがピンピンに勃起しちゃってるよ？ ほらほら♥」

「ハイグレえっ♥ は、なに、言ってっ……ハイグレっ♥ 勃起なんて……そんな……あ……♥」

――あまあい声でそれを教えてあげていた。

告げられた森夏は自分の乳首が勃起しているなんて！ と思いながら視線を下に向けて驚愕してしまう。

七宮の手のひらに乗せられたおっぱい♥ たっぷり、ずっしりとしたその胸の頂点で乳首が本気で勃起してしまっていた。

本気というか、彼女の人生でここまで勃起したことはないというほどで、白い水着の生地を大きく押し上げてアピールしていた。

それは彼女としても認めたくないこと、それは「ハイグレなんて訳分からないことをさせられて興奮している」ことの証明でもあった。

一回するごとに手は滑らかにスライドして行って、その度にじんわりとした快感が森夏を包んでいく。

指摘された通り勃起した乳首を揺らして、また一回――。

「ハイグレっっっ♥ なんぞっ……♥」

――ハイグレをしてしまう。

その動きでピチピチの水着がおまんこへと食い込んで、その刺激で既にマン汁がポタポタ床に垂れるほどになってしまっていた。

「お汁溢れすぎ……♥ モリサマ、お漏らししちゃってるみたい♥」

「っ♥ ハイ……グレっえ♥ 誰が……汗よ、こんなの……ハイグレえ♥」

また耳元で囁かれるが、森夏は今度は視線を向けない。

向けなくても自分でわかってしまっていた。

マン汁が溢れて、床にポタポタ垂れる音を聞いて、自分が興奮して感じてしまっていることを自覚していた。

それを汗だと誤魔化すけれど、自分でも快感に濡れているのはしっかりと理解している。

ハイグレをする度に乳首が、おっぱいが、おまんこが擦れて、身体を締め付けられる快感と、色々な人生のしがらみか何かから解放されていくような気持ち良さに甘い声を漏らし、長い髪を揺らしていた。

その森夏の乳首を指先でチョンと触れた七宮は、また身体を密着して彼女をどんどん深く誘惑していく。

「ね……♥ モリサマ♥ もっと……♥ もっとも一っと気持ち良くなならない？ このカワイイ乳首……♥ もっと♥ もっと♥」

「え……………？ ハイグレっ……なに、言って……………っ♥ (もっとって……今でも……気持ち良いのに……っ♥)」

囁かれた言葉、今でさえ感じたことないくらい気持ち良くなってしまっているのにこれ以上？ と森夏は生唾を飲んで一瞬怯んだ。

自分の知らない快感をこれ以上知るのは怖いという防御反応として当然ではある。

「少し前かがみになって？」

「……………っ」

森夏の返事を待たないで囁かれる甘い言葉、七宮による「気持ち良い」レクチャー♥
彼女にはまだ、まだギリギリ洗脳が完了し切っていないのでそれを拒否することも出来る状況ではあった。

しかし、彼女は手をスライドさせてハイグレをしながら、その言葉に従う。

さっきまでピシッと背筋を伸ばしていたのに前かがみになり――。

「♥ 足、もう少し広げて♥ ほら、腰もグッと落として？ そしたら両腕でおっぱいを挟み込んで、ほら♥」

「はあ……はあ……♥ っ♥ んうっ……♥」

――言われるがままに足を開いて、両腕で水着から溢れそうなおっぱいを挟み込んでいく。

”むにゅう♥”と大きなおっぱいは柔らかかそうに歪んで、乳首は更に勃起したように布地を突き上げていた。

その状態で森夏の手は股関節にしっかりと当てられている。

「それでよしっ♥ 一緒にやろ？ ね……♥」

「……………っ♥」

七宮の言う通りのポーズ、女の子がするには恥ずかしいガニ股でマン汁を垂らしながら森夏は生唾を飲んだ。

それは、ゾクゾクする予感、さっきまでより気持ち良くなってしまう期待であり、その震えて寄せられたおっぱいは”ゆさゆさ♥”と揺れていた。

エロい乳揺れを満足そうに見た七宮は改めて森夏の正面に回り込むと、彼女以上に足を広げて。小柄ながらにボリュームたっぷりなおっぱいをグッと寄せるようにハイグレセッティング♥

一見、相撲取りの勝負前の様にがに股で向かいあう美少女二人。

「思いっきり♥ 思いっきりだよ？ 肩ごと持ち上げるようにして、ね？」

「……………っ♥」

タイミングを計る様に向かい合う二人。

二人とも興奮して床にマン汁をポタポタ垂らしてしまう。

その、垂れる音が一致した瞬間、森夏と七宮、二人は同時に股関節を撫でるように手をスライドさせて肘が肩と平行の位置になるまで思い切り引き上げ——。

「ハイグレええええっ♡」

——非常にキレの良いハイグレをキメて見せた。

素早く、大きく、ダイナミックなハイグレ、その勢いで森夏のおっぱいは大きく”ぶるるん♡”と揺れた。

それは七宮も同じく、二人はおっぱいを揺らし、更に元々ぴっちりとした水着の森夏は、おまんこに深く食い込んでその刺激もあり一瞬で絶頂していく。

「イク♡ ハイグレ♡ ハイグレええええ♡ ひいいいん♡ (こ、これしゅごひいい♡♡)」

水着がピッチリと張り付いてその形の良さをアピールするようなおっぱいを揺らしつつ、森夏は首を反らして激しく絶頂していく。

ガニ股のまま腰をカクカク♡ ヘコヘコとだらしなく揺らしてマン汁を垂れ流す彼女はキレの良い、最高のハイグレの余韻に浸っていた。

その感じている森夏を見て七宮も興奮したように熱い息を漏らしていく。

「ふうう……♡ どうかな、モリサマ……♡」

「はああ♡ ああ……あはああ……♡♡ ——！！」

肘を上げたまま余韻に浸っていく森夏だったけれど、一度ビクッと身体を揺らし、おっぱいを”ぶるん♡”と震わせ、マン汁を噴き出したら顔は赤らめたままキリっとした表情でまるで軍人の様に直立した。。

いきなりの変貌に七宮は驚くことはなくむしろ嬉しそうに微笑むと改めて「どうかな？」と抽象的に尋ねる。

その言葉に森夏は訓練でもしているかのように、ビツとした動きで敬礼をして見せた。

「はっ！ ソフィア様！ モリサマ、ハイグレ洗脳完了いたしました！ まことに感謝いたします！」

「おお♡ よしよし完全に覚醒したみたいだね♡」

まるで人が変わったかのような森夏の姿に七宮は満足そうに拍手していく。

森夏はキリっとしながらも、マン汁はどんどん垂らすし、胸を張っていることで薄い水着の生地を乳首が突き破りそうなほどに勃起しているのをアピールしている。

しかし、さっきまでの彼女の様にそれを恥じる様子は一切なく、むしろ誇らしげですらあった。

「それで、モリサマはハイグレ人間になった感想はどうか？ 元の何でもないモリサマに戻りたい？」

「はっ！ おっぱいをゆっさゆさ揺らしてハイグレをするのはとても気持ち良く、おっぱいを揺らして乳首を擦れるともっと気持ち良いですっ♡」

異常な質問にも彼女は嬉々として答えていく。

しかもその答えは異常とも言える内容であり、キリっとしていた森夏の口元は緩んで「嬉しさ」を抑えきれないようだった。

「勃起した乳首がハイグレをする度にこすれて、もっともっと勃起したい、もっと乳首を勃起させたいと思ってしまいます♡ 勃起乳首大好きですっ♡ ハイグレ最高ですっ♡ 元のモリサマになど戻りたくありません！」

「そっかそっか♡ ふふふふ♡ それは洗脳した甲斐があったってもんだよ♡ 他には？」

本来の森夏では絶対に、何があっても言わなかったような言葉を連続して発していく。

どこか誇らしげですらある表情で、一言一言喋るごとにおっぱいが揺れて、興奮に勃起した乳首も震えていた。

「水着の締め付けが非常に気持ち良く、ハイグレをすると私のこのデカパイがゆっさゆさ♡ 揺れることにより強い締め付けを生んで更に気持ち良くなります♡ それが最高に気持ち良く、おっぱいを揺らすのが大好きになりました♡ 大きな乳首は自慢の乳首です♡」

森夏の無様とも言えるような答えを聞くと七宮は非常に満足そうに微笑んで、その手を彼女のおっぱいへと伸ばしていく。

まずは指先でその勃起乳首をツンツンと刺激して、乳輪をなぞる様に刺激していく。

その刺激だけで森夏は「ああ♥ ソフィア……♥ だめえ♥」と気持ち良さそうに喘いでいた。

七宮から質問や命令をされた際には、まるで軍人か何かの様に答えるけれどそれ以外は森夏として答えるようだった。

つまり、今乳首を刺激されて喘いでいるのは森夏の本音の声である。

敬礼をしたまま乳首をコリコリさせていき、七宮がその乳首をキュッと掴むと――。

「ひああっ♥ おっぱい揺らして擦れてたからっ♥ 敏感になっへ♥ ひいいい♥ イクっ♥ あっ♥ イクイク♥ イクううう♥」

”ぷっしいいい♥”

――あっさりとは絶頂し、気を付けの姿勢のまま潮吹きをしてしまっていた。

教室の床に潮をまき散らして森夏はカクカクと身体を震わせるも、姿勢は崩さないでいる。

それは洗脳は完全に終了した証拠でもあり、潮吹きしながら気を付けをするという無様を晒していた。

「はああ♥ はあああん♥ あああ♥ 乳首♥ すごい……♥ んんんっ♥」

潮吹きの余韻で甘い声を漏らして、身体を震わせる度に大きめのおっぱいを揺らす森夏。

揺らすのが大好きになったというだけあって、わざとらしくらいその胸を揺らして、七宮に見せつけていた。

「私も♥ モリサマのおっぱいがぶるんぶるん揺れるの大好き♥ すごく下品ですっごくエッチ♥ 自分でドスケベですってアピールしているみたいで……♥ 興奮しちゃう♥」

「ありがとう……♥ もっと、私のおっぱい見て？ んああああ♥ おっぱい♥ 強く掴んだら、ひいいっ♥」

優しく、どこか楽しそうな笑みを浮かべた七宮は、その柔らかくて形も完璧な森夏のおっぱいに指を食い込ませて揉んでいく。

その最初の一揉み、やや強めにおっぱいを掴まれただけで森夏はまた腰をカクカクさせて敬礼したままイってしまっていた。

水着で擦れたこともあってかなり敏感になっているみたいで――。

「も〜♥ モリサマ、おっぱいエッチすぎるよ♥ こんな簡単に喘いじゃうとか……♥ スケベ♥ エロ女♥ 雑魚おっぱい♥」

「言わないでっ♥ そんなことっ♥ あああ♥ 言われるとっ♥ ん……♥ あ♥ 余計に感じちゃうう♥」

——ただ揉まれているだけなのに森夏は喘ぎ声を漏らしてお尻を揺らしていた。勃起した乳首は触ってほしそうに震えていて、七宮が少しでも触れると、敏感なそこへの刺激に声を漏らしていた。

「おっぱいは敏感、あっさり潮吹きするくらいだし……乳首も気持ち良いの？」

一度胸から手を離れた七宮は、完全に勃起して小指に先っぽ位にもなっている森夏の乳首を観察していく。

見られているだけでその乳首は震えていて、白の水着を押し上げてプルプル震えている。見ている人が虐めたくなるような勃起乳首に七宮は舌なめずりをしながら質問をした。

「はあ……♥ はあ♥ ん……♥ 乳首も、一緒よ♥ おっぱいと一緒♥ キュッて締め付けられて気持ち良くなっちゃてるわ♥ だから、乳首も一緒に勃起してるの♥ 気持ち良いからピン立ちするのは当然っ♥」

気を付けの姿勢で敬礼をしながらアホなことドヤ顔で宣言する森夏。その答えを聞いてクスクスと笑うと七宮は再び乳首を狙ってツンツン刺激していく。水着を精一杯押し上げている乳首、しっかりと勃起してコリコリとした硬さになっているその乳首を突いて、乳輪を指の先で擦り刺激。

「はああ……♥ あ♥ 勃起乳首♥ コリコリ、きくっ♥ あああああん♥」

「乳首しか触ってないのに大げさだなあ……♥」

ツンととがった乳首を刺激されて甘い声を漏らして腰をくねらせていく森夏。ツンツンしながら七宮は再び森夏の後ろに回り込んで、両手で乳首をそれぞれコリコリ♥
弱い刺激のはずなのに敏感な身体になってしまっている森夏にはかなりの快感のようで甘い声を漏らしていく。

突かれるだけでも敏感で声が漏れるそこを――。

「乳首の硬さはどんなものかな～？ えい♥」

”ぎゅむっ♥”

「ひおおお♥ おっお♥ おっ♥ 乳首っい♥ はふうっ♥♥ イクっ♥ イク
うう♥ おお”♥」

――七宮はやや強めに摘まんで硬さのチェック。

乳首を摘ままれて森夏はだらしなない喘ぎ声をあげて、それだけでイってしまっていた。
身体を震わせる度におっぱいも大きく揺れて、おまんこからも汁が垂れていってしまう。
勃起した乳首をクニクニ刺激される度に、腰をカクカク♥

放課後の空き教室で、ハイグレ水着に身を包んだ美少女二人のあまりにも無様でスケベな宴。

優等生美少女の雰囲気なんてこれっぽっちも感じさせないドスケベな姿を晒す森夏の股間に手を伸ばすと、その食い込んだ水着を更に七宮はグッと掴んで引っ張りあげていく。

「おひいいい♥ おまんこっ♥ 食い込ませないでっえ♥ おおおっ♥ ほっあお♥」

おまんこに食い込む水着、ただ食い込ませるだけではなく七宮はその手を小刻みに揺らすので、強い快感を覚えていく。

くちゅくちゅとエロい音を立てて水着が食い込み、その刺激はまたおっぱいへ、乳首へと伝播していく。

快感の連鎖にだらしなくヨダレまで垂らしていく森夏の耳に七宮は口を寄せて軽くキスをした。

「ちゅっ♥ ね、おまんころっとのぐっちゃぐちゃだけど……♥ ハイグレしたい？」

敏感な耳への甘い刺激に加えての質問に、森夏は敬礼をビシッと直すと「はい！」と大きな声で返事をした。

「したいっ♥ ハイグレしたいっ♥ おっぱいぶるんぶるん♥揺らしてハイグレしたいっ♥」

それは即答だった。

森夏はもう本心としてハイグレをしたいと願うようになっていた。

今、ほんの少しの間ハイグレが出来ないだけでうずうずとしてしまうほどに深くハイグレ洗脳が根付いてしまっている森夏は、気を付けの姿勢のままマン汁を垂らしまくり、どんどんニーハイソックスに染み込ませていく。

「誰かに見られながらでもしたい？ 誰に見られててもハイグレしたい？」

「はいっ♥ し、したいっ♥ したいの♥ 勃起乳首っ♥ おっぱいも揺らしてっ♥ ハイグレアクメキメるところをっ♥ お♥ おおお♥ おほおおっ♥」

誰かに見られてでも？ という質問に森夏は、七宮以外の人の見ている前で自分の出来る最高のハイグレをする姿を思い浮かべただけでイってしまっていた。

おまんこに水着を食い込まされたまま、“ぷししいい♥”と二度目の潮吹きアクメまでして腰をカクカク♥

おっぱいも”たぶたぶ♥”揺らして白目を剥きそうなほど感じてしまっていた。

この姿を、自分のハイグレを誰かに見られる、その想像だけでも森夏は興奮しまくっていた。

「に～はっはっは♥ よく言った！ ハイグレ人間モリサマ♥ それじゃあ、誰か連れてくるから存分にモリサマのデカ乳ぶるんぶるんのハイグレを見せてやりなよ♥」

「はあ♥ はあ♥ わ、わかったわ♥ ハイグレっ♥ ハイグレえっ♥ 私の、おっぱいでハイグレの魅力♥ 教えてあげるのね♥ ハイグレっ♥」

誰かを連れてくる。

その言葉は本来ならば拒否しなくてはならないというのに、森夏は興奮し、胸を高鳴らせていた。

これから来る誰かのことを思って、少しでも良いハイグレをしなくては！ なんていう常人からは理解不能な思考回路で森夏はさっき七宮に教えて貰ったようにキレの良いハイグレを繰り返していた。

それを見てクスリと笑うと、七宮は脱ぎ捨てたコートを羽織りなおすと「少し待ってるよーに♥」とウィンクをしてパタパタと教室を出ていった。

――。

――。

「ソフィア？ こんなところで何があるというだ？」

「ふっふっふ〜❤️ ま、ついてくればわかるよ、きっと邪王真眼も気に入るはずさ❤️」

「？」

廊下を歩く七宮の隣を歩くのは、短い髪をして眼帯をした邪王真眼こと小鳥遊六花。
言葉巧みに誘導されて彼女は向かう先は、例の空き教室。
そこに近づいていくと、彼女の耳に何か音、声が聞こえてきていた。

「……………？（何の音だ？ 運動部の練習？）」

何かの音、その正体がわからずに首をかしげる六花。
一定のリズムで規則正しく聞こえてくる声、その声の正体に気が付くのは——。

”がらっ！”

「モリサマ❤️ 邪王真眼をつれてきたよ〜❤️ しっかり見て貰うと良い❤️ ご自慢のお
っばいハイグレを❤️」

「おっばいハイグレ？ ……………え……は？」

——教室の中に踏み入れた瞬間だった。

七宮にその背中を押されて教室に踏み入れた六花は目の前の人物が誰か一瞬わからな
かった。

しかし、その人物がさっきまで聞こえていた規則正しいリズムの声の持ち主だとい
うのは即時理解した。

その理解から遅れること数秒、目の前の人物、それが誰かを六花は理解した。

「……………丹生谷？」

「ハイグレっ❤️ ハイグレっ❤️ ハイグレえっ❤️ いっ❤️ ハイグレ❤️ (気持ちいい
❤️ おっばい❤️ 見て❤️ 乳首もすっごく勃起してるの❤️)」

目の間にいるのは丹生谷 森夏。

六花は相手の顔を2 mと離れていない位置で見ながらも数秒間それを理解できなかった。ピチピチの水着を着て、おっぱいを”ゆっさたっぷ♡”と揺らして、ハイグレをする相手を丹生谷 森夏だと認識できないでいた。

自分の知っている森夏が決してすることもない、いや、するしないの前にその行為の意味が理解できないポーズを嬉しそうに取っていることを把握することが出来なかったのだ。

いつもの優等生然とした美少女顔はだらしなく緩み、がに股に足を開いて、指をそろえて伸ばした手を股関節のラインをなぞる様にスライドさせる。

下品としか思えないポーズを繰り返していく森夏に彼女自身がそうだったように六花はドン引きしていた。

「に、丹生谷？ な、なんの真似なんだ？ はっ、敵対組織からの精神感応の攻撃だな！」

ドン引きしつつも、あまりにも異常な行為に六花は戦闘ポーズをして眼帯に手をかけ『邪王真眼』を開放する準備をして見せた。

しかし、そんな六花の行為を一切気にしないで、突っ込みも、昔の様に文句をつけることもなく森夏はハイグレを繰り返していた。

「ハイグレっ♡ ハイグレっえ♡ ハイグレっ♡(ああっ♡ 見られてる♡ 小鳥遊さんにこんな近くで♡ だめ♡ だめえ♡ 見られてると乳首もっと勃起しちゃう♡)」

「な……んなの……」

ドン引きする六花の視線を浴びながらも森夏はリズムを崩さないまま、キレの良いハイグレを見せていく。

がに股で腰をしっかり落とした状態から、やや前かがみでおっぱいを”むにゅう♡”と寄せて、一気に腕を引き上げ――。

”ふるんっ♡”

――おっぱいを大きく揺らしてのハイグレ♡

水着の下で跳ねるように揺れる巨乳、布地を押し上げる乳首はしっかり勃起♡

一回するごとにマン汁を垂らして気持ち良さそうに涎を垂らすという普段の森夏では考えられない姿に六花は『いつものノリ』で対処しようとしてもしきれないでいた。

「そ、その動きをやめろ丹生谷！ お、おかしくなりそうだ……………っ！（う、おっぱい、やっぱり大きいな……。それにしても、なんの儀式なんだ？ この動きに何の意味があるん

だ?)」

「ハイグレっ♥ ハイグレえっ♥ ハイグレハイグレっ♥ (スッゴイ目で見られちゃってる♥ 変態って思われてる? でも、でも♥ すごく気持ち良いっ♥ 見て♥ 私のおっぱい♥ おっぱいハイグレ見てっ♥)」

ハイグレを繰り返す森夏を前に戸惑いを隠せないでいる六花ではあったが、その眼には大きく揺れるおっぱいが写っていた。

同性から見ても羨ましいほどに綺麗で大きなおっぱいが、ハイグレの度に大きく揺れる光景は魅惑的であり、またエロい。

森夏にとって、大きくて形の良い胸は元からそれなりに自慢であったけれど、今は更に自慢の部位となり殊更にアピールして見せつけていく。

「おかしく、なってしまったのか? そんな、小さな水着を着て……お、おっぱい……はみ出そうになっているし、お、お股も濡れて……っ♥ (小さな水着の下で丹生谷に大きなおっぱいが押さえつけられて、あのコマネチ? みたいなポーズの度に揺れて……凄い、ゆさゆさと、あ、あんなに大きいのか……♥)」

「ハイグレっ♥ ハイグレえっ♥ (んんっ♥ おっぱい♥ やっぱおっぱい見てる♥ 見られちゃってるっ♥ だったらもっと、もっとっ♥ モリサマーのハイグレおっぱい見てっ♥ ぶるんぶるん揺らすからっ♥)」

対話を試みる六花ではあったけれど、その視線は気付けば森夏のおっぱいに完全に注がれていた。

森夏の行動を理解出来ないままに、揺れるおっぱいに対して強く興奮しだしていた。

それに気付いた森夏は「もっと見て♥」と大きく胸を揺らし、六花へのアピールをしていた。

「っ……丹生谷……っ……あ……♥ (乳首が水着に……あ、あんなにくっきり……あんな風になるものなのか?)」

「ハイグレっ♥ ハイグレえ♥ ハイグレ♥ (乳首にも気づかれちゃった? ふふふ♥ 凄いでしょ、ハイグレ人間モリサマーの勃起乳首♥ 水着なんかには負けないんだから♥)」

胸をジッと見ている六花は直ぐに、勃起した乳首にも当然気が付く。

水着を思い切り押し上げて見せるその存在に生唾を飲んで、激しく上下に揺れ擦れるそれにどこか惚れ惚れとした視線を向ける。

憧れなのか、はたまた別の感情なのか、六花自身も処理できない感情のままジッとダイナミックに”たっぷたぷ♥”と揺れるおっぱいと乳首を見ていき、ポタポタと垂れるマン汁に生唾を飲んでしまっていた。

ドン引きしていたはずなのに、気づけば魅了されている六花、その背後でいつの間にかロングコートを脱ぎ去ってピンクの水着姿になっていた七宮は――。

「ふっふっふ♥ 邪王真眼破れたりっ♥ ハイグレっ♥」

”たっぷんっ♥”

――森夏に負けないようにキレのあるハイグレをして見せて、例の玩具にしか見えない光線銃を構えて発射した。

森夏のとくと同じく、子供用の玩具の電子音のような発射音と共に照射されたチャチな光が六花の身体を捉えた。

「え……あ！ きやああああああ！！」

光に包まれた六花の制服は、森夏のとくのようにゆっくりと水着に変化していく。

その小柄な身体を包み込むのは薄紫色の水着、形自体は森夏と同じだが、自分の身体にフィットしているようだった。

「なに、これ……え……？ 手、手が、なんで！ 勝手動いて、し、鎮まれっ！ 鎮まれっ……！ ああああ！！」

薄紫の水着姿、小ぶりなおっぱいの形がしっかりと見えてしまうくらいに張り付いたその水着。

身体にフィットしているといっても、股関節はしっかりと露出しておまんこに食い込むその姿になった六花は、自分の身体が自然と動いてしまうことに戸惑っていた。

戸惑いながらも細い足をガニ股に広げて、やや腰を落とすと、誰に教えられた訳でもなく森夏と七宮の二人と同じくしっかりと指を伸ばした手を股関節にセットした。

「なんでっ！ こんな、や、やだ、助けっユータあっあ！ あああっ！ ハイ……グレえっ……♥ ひいんっ♥ (なにこれっ♥ お股じんじんして……♥)」

股関節に当てた手を、ぎこちなく、ゆっくりとスライドさせて、恋人に助けを求めながら初ハイグレ♥

水着がおまんこに食い込み、胸を擦る刺激に六花もまた快感を覚えて甘い声を漏らしていた。

初めてのハイグレによる快感と開放感に六花は戸惑いながらも、自然とまた手が股関節へとセットされていく。

自分の状況も理解出来ない六花を見て七宮は森夏に「モリサマ♥ 先輩としてレクチャーしてあげてよ♥」と提案した。

その言葉を受けて森夏は一定のリズムで行っていたハイグレを止めて、まじまじと六花の水着姿に目を向けた。

「ふう……。へええええ？ 結構似合ってるじゃない♥ おっぱいも可愛い〜♥ 私とソフィアはデカパイだけど、小鳥遊さんのはプチパイって感じ？」

「う、うるさいっ！ ハイグレっ……♥ んんっ♥(見られると、恥ずかしい……！ それに、やっぱり丹生谷の乳首が凄く大きくなって……白い水着も、く、食い込み過ぎじゃないのか?)」

ジロジロ見られる恥ずかしさに視線を逸らしながらぎこちないハイグレを続ける六花。

まだまだ動きにキレはなくてダイナミックさにかけるけれど、小さめのおっぱいは水着の下でしっかりと揺れていた。

そのおっぱいを見て森夏は生唾をごくりと飲んで、ジロジロと舐めまわす様に見ていく。

「おっぱい♥ 可愛い♥ こんなに小さくても揺れてて♥ へええ……♥ わあ……♥ (ちっちゃくて可愛い〜♥ ちょっと揉みたいかも♥ ちょっとっつか、かなり?)」

「っ！ 丹生谷っ……目が怖い……ハイグレっ♥」

熱の籠ったというか、籠りすぎているような森夏の視線に六花は怯えつつもハイグレをして、食い込む水着の気持ち良さに小さなお尻をくねらせる。

その姿は森夏のエロさとはまた別の可愛らしさに満ちていた。

ぎこちないハイグレの動きもまた愛らしく、森夏は涎さえ垂らしそうになっていた。

「先輩として……♥ 私がしっかりハイグレを教えてあげるわ♥ そのおっぱいも♥ ちっちゃくて可愛いおっぱいも私のおっぱいの乳首くらい勃起させなきゃだしね♥」

「そ、そんなに！？（丹生谷と同じくらいだなんて……♡）」

舌なめずりして六花に迫る森夏は、水着に包まれた自分のおっぱいを下から”むにゅん♡”と持ち上げて見せる。

その頂点の乳首、水着の生地を押し上げるその勃起乳首を自分でクリクリと弄って、六花に見せつけていた。

見せつけられた六花は生唾を飲んでマジマジと改めてその乳首を見る。

「丹生谷ほど大きくなったら……っ♡ こ、困る……ハイグレっ♡ っう♡」

小指の先端程の大きさになっている森夏のエロい乳首♡

それに興奮はしてしまうものの、自分の乳首がそうってしまったらと考えてモジモジと六花はしていた。

そして、森夏の乳首、おっぱいから目を離せないままレクチャーが始まっていく。

「いい？ まずは足はもう少し開いた方が良いわね。お相撲さんのイメージくらいで、そこからお尻を少しあげるの、わかった？」

「……………（少し動くだけであんなにおっぱいも、乳首も揺れて……♡）」

お手本をやって見せる森夏。

美少女だというのに、おまんこに水着を食い込ませてがに股になって見せるという恥さらしな姿を見せても一切照れはない。

後輩ハイグレ人間たる六花をちゃんと指導してやろうという意気込みを見せながら森夏は足を開いて腰を落とした。

「ほら、見て？ こうすると水着が食い込むでしょ？ これが大事な♡ そして手も、しっかり指を揃えたらセット！ その状態で少し前かがみになって？」

「っ……♡（おっぱいが寄せられて……♡ 凄い……♡ あんなに柔らかそうに……♡）」

七宮に教えられたキレの良いパイ寄せハイグレを伝授しようとしていく森夏だが、六花は完全に上の空状態。

ポーっと、恋するように森夏のおっぱいに視線を向けていて、その胸が”ゆっさ♡ たっぶ♡ むにゅ♡”と揺れて、動く姿に釘付けでレクチャーもロクに聞いていない。

ただただ、ぎこちないハイグレを繰り返すだけ。

「……………はぁ……聞いてないわね……」

溜息を一つ吐いて、流石にこれではダメだと判断した森夏。

ハイグレ人間になったとしても、本人の性質である面倒見の良さと優等生气質は変わらない。

そんな彼女は「小鳥遊さんを立派なハイグレ人間にしなきゃ！」なんて気持ちをもって、彼女の背後に回り込んだ。

「え！？ な、なにを！」

「あなたがちゃんと聞かないから！ そんなんじゃ立派なハイグレ人間になれないでしょう？」

「だ、だだ、誰がハイグレ人間になりたいなんて言ったのだ！」

背後に回り込んで、七宮に教えられた時を思い出す様に森夏は立夏の背中に密着する。

”ぼにゅん♥”と大きなおっぱい、そしてコリコリと乳首の感覚を教えるように押し当てると、六花の耳元に口を寄せながら彼女の手に分の手を添えた。

「ほら、指の揃え方は悪くないけど角度はまだまだね、ここに当てて……もう少し斜めに♥」

「や、やめろ！ 私の精神に介入するその魔術をやめるんだっあ……っ♥（背中に♥ 丹生谷のおっきなおっぱいが♥ 乳首もっ♥ あああ♥）」

さっきまでマジマジと見ていた森夏のおっぱい、乳首が押し当てられる快感に熱い吐息を漏らして興奮していく六花。

その頬は既に真っ赤になっていて、薄紫色の水着、その股間には染みがついてしまっていた。

必死に自分はハイグレ人間になんてならないと抵抗して身体を揺らす六花だが、身体を揺らすと森夏のおっぱい、乳首の感触を強く感じられると気づいてしまい、わざと身体を揺らしたりしていた。

「こうやってハイグレ♥ ハイグレっ♥ ん？ あ、ふふふ♥ 乳首もちゃんと立って

きて可愛い〜♥ ピンピン♥ セクシーな紫の水着に映えるわね♥」

「や、やめ、見るなあ……！（見られていると、なんで、こんなに♥ ドキドキしてしまう……♥）」

「恥ずかしがっちゃダメ♥ 私の乳首だってあんなにまじまじ見てたんだから♥」

レクチャーをしながら森夏は、六花の水着に乳首がくっきりと浮かんでしまっているのを見つけた。

まだ小さく、森夏に比べれば未熟だけれど、必死に自己主張する姿は実に愛らしいものだった。

その乳首を森夏はツンツンと突いていき、乳輪をなぞる様に指の先で刺激していく。

「はふうん♥ や、やめてっ♥ 乳首、だめえ♥」

与えられる快感に六花は甘い声を漏らしてしまい、小ぶりなお尻をくねらせていた。

水着に形を浮かび上がらせてしまっている乳首に逃げ道なんてあるはずもなく、隠れることも出来ないままに森夏の指で弄ばれていく。

「乳首は恥ずかしいものじゃないの♥ 私は自分の乳首もおっぱいも大好き♥ だから、たっぷり揺らして見せつけたいの♥ だから、ほら、もう一回♥ 腰を落として♥ 手をここにそえて……♥」

「ひあ……♥ やめ、も、もうっ♥ うううっ♥」

興奮しきってしまっていて、小さな身体を小刻みに震わせる六花。

背中に感じる森夏のおっぱい、そして自分の乳首への刺激にもう脳がショート寸前のような状態だった。

その六花の手に、優しく自分の手を添えて、おっぱいを”ぼたゆん♥”と押し付けると、そのまま――。

「さ、一緒に♥」

――手をダイナミックにスライドさせた。

「ハイグレええええっ♥」

二人の声は見事なハーモニーを奏でていくのだった。

六花は必死に、必死に抵抗していく、抵抗していくんだけども——。

「ほら、もう一回❤️ いくわよ？」

「やめてっ❤️ これ以上は本当になっ❤️」

——森夏は教育熱心に彼女にレクチャーしていく。

足を開かせ、腰を落とさせ、おっぱいを押し当てながら前かがみにさせたら、素早く手を引き上げる。

「ハイグレええええっ❤️」

おっぱいを寄せて、“たっぷん❤️”と解放してのハイグレ❤️

キレの良いハイグレ何度も何度も森夏はレクチャーしていった。

そこに我慢できなくなった七宮も参加して、三人の声はその後数時間校舎に響いていくのだった。